

カラフルな男たち

日本の男性には色気がない、とつねづね思っていた。私
が言ってるのは中味のことではなくて服装のことだから、
色味というべきかもしれない。

国会中継などを見ても、極彩色で点在する女性議員を囲
んで、区別がつかない紺やネズミ色の背景をなしているの
が男性議員だちだ。クールビズとかになって、少しはパツ
とした色遣いをするのかと思っていたら、ネクタイがなく
なった分、さらに薄ぼけた感じになった。

そこへいくと外国の男性諸君は色づかいが派手だ。フラ
ンスやイタリアのラテン系の国の男たちなど、何とも鮮や
かな色の服を着ていて、遠くから眺めるのにはいいけれど、
近くへ寄るのがためらわれるほど。なんで男がそんなにお
しゃれをするんだ、と首をかしげてしまう。

それにまた派手なのはヨーロッパに限ったことでもない
ようで、韓国の歴史ドラマでは、女性より男性のほうがず
っとカラフル。服装の色彩感覚に関しては、民族固有の社
会通念が存在するのだろうか。

ヨーロッパの男性は、ことばによる愛情表現も積極的だ
という話である。私には経験がないことで人づてに聞いた
だけだが、外国人の女性と結婚した日本人男性の一番の気
苦勞は、毎日「愛してる」「君が好きだ」と繰り返し耳元
でささやかなくはならないことだそう。それも同じフ
レーズでは芸がないので、動詞を変え、言い回しに変化を

カラフルな男たち

持たせ、否定文や疑問文などを種々の構文を駆使し、つまりは手を変え品を変えて工夫するので、それがすごく面倒らしい。要するに、お決まりのダークのスーツに当たり障りのないネクタイではなく、毎日毎日、今日はなにを着ようかと知恵をしぼるのと同じかもしれない。

それでも毎日やさしい声で「愛してる」と言ってもらえたら、うれしいだろうなあ、と若い頃は思っていた。

ところが先日、テレビで面白いことを聞いてしまった。ガラパゴス島だったか、あるいはそれに似たような南の島の科学ドキュメンタリーである。そこは人の住まない島で、キテレツな姿形の巨大な鳥や獣、爬虫類なんかのパラダイスだ。それらの生物のじつに興味深い生態を紹介した後で、ナレーターが「オスがカラフルな場合は一夫多妻で、地味な種類は一夫一婦制のことが多いそうです」と言ったのだ。

そうか、そうであったか。私は頭にピンとひらめいたのであった。カラフルなオスは基本的に頭の中に複数の女性を思い描いているので毎日「今は（も）、君が（も）好きだ」と派手にアピールしないではいられないのだろう。対するメスのほうでも、このオスはいつ他のメスの方に行ってしまうか分からない、もしくは今も別のメスのことを考えてる可能性がある、と本能的に悟っているので、愛情を確認する必要がある。

それに引き替え地味なオスは、いったん誰かと番^{つが}いに

カラフルな男たち

なったが最後、一生このメスと離れないと深層心理で確信しているので、殊更に愛情表現をする気になれない。

だったら、私はやっぱり地味な単色のほうがいいかなあ、と考えてしまってから気がついた。いけない、いけない、これは遠い南の島の、奇っ怪なトカゲやイモリのオスの話だった。ゆめ、ニンゲンのオスの話と勘違いしてはいけないぞ。

うん、それはそうなんだけどねえ…。

(追記。一六年も前に書いたのだが、状況はあまり変わっていないような。それでも、昔は見かけなかったようなおしゃれな若い男性を見ると心が華やぐ。もはや自分とあまり関わりがないので尚のこと。)

初出|| 北國新聞「北風抄」二〇〇六年七月一六日

ホームページ掲載|| 二〇二二年四月二三日

カラフルな男たち